Lovers ～運命の二人～

紫雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｖｅｒｓ　～運命の二人～

【Ｎコード】
Ｎ５３２７Ｘ

【作者名】
紫雲

【あらすじ】
偶然に出逢った二人。
緒方純恋と中村涼。出逢った瞬間に恋に落ちた二人。
そんな二人には偶然とは思えないような繋がりがあるのだった。
出逢うべくして出逢った二人のｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ。。

第一章『出逢い』　♪prolouge

出逢いには2種類の出逢いがある。
偶然の出逢い、そして、運命でさだめられた出逢い。
もちろんどっちが良いとか、どっちが素敵とか言うことはない。
偶然に出逢った二人、運命に引き寄せられた出逢い。
どちらにも素敵な出逢いはあるものだ。

でも、男女の出逢いになると話は違う。
赤い糸とか、運命の人との出逢いとか言った方が素敵に聞こえるし、
偶然が運命だって感じる事もある。
もちろん、僕だってそんな運命の出逢いに憧れてはいた。
そしてあの冬、彼女と出逢う事で僕に運命を感じさせてくれた。

僕と彼女が出逢ったのは、僕が１８歳、彼女２１歳、その年の秋から冬へ向かう少しずつ寒さが身に染みるようになってきた季節だった。
それはまるで天使との出逢いのようで、そして運命的な出逢いだった。

そんな素敵な出逢いを経験した僕は、一瞬で天使のような彼女に恋をしてしまった。
そして、彼女も、きっと僕と同じ気持ちだったと思う。
お互いの運命に感謝し、出逢いに感謝し、惹かれ合った。
そんな二人の恋は、彼女と僕の恋はその瞬間から始まった…。

第一話　♪落し物

僕は休講になった2限目の時間をつぶそうと大学の図書館に向かった。
図書館には、別に勉強をするとか、本を読むわけではないが、あの空間のあの空気感が好きで足を運ぶ事がよくある。僕の隠れ家と言う感じだ。

その日は朝から雨が降っていたからか、図書館はいつもよりも人が少なく、
いつも以上に静かな感じがした。

図書館に入り、最初に瞳に映ったのは、その静かな空間の窓際の席に座り、窓の外の雨をぼんやりと、まるで雨粒を数えているかのように窓の外を眺めている女性だった。
とても綺麗な女性だった。そして何より淋しそうな横顔だった。
そんな彼女の頬から一粒の涙が零れるのを偶然見てしまった時には、なにかが僕の心をくすぐり、心が揺れるのを感じた気がした。
自分でも不思議に思うが、初めて見かけた女性にここまで心を奪われるとは・・・
と言う感じだった。きっと、この図書館の中で、彼女の涙に気づいたのは僕だけだったと思う。
彼女の涙の訳はわからなかったが、女性の涙を、あんな哀しそうな涙を、僕だけが気づいた。
そう思うだけで、心が痛んだ。

彼女は大きく深呼吸をして上を向いてから立ち上がり、零れる涙を堪えながら図書館を後にして行ってしまった。僕は声をかけようかどうしようか迷った。

でも結局、彼女の後姿を見送ってしまった。
彼女が図書館を去った後、僕は彼女が眺めていたものと同じものを見て、彼女を少しでも感じたいと言う衝動に駆られその場所に座りたくなり、さっき彼女が座っていたところまで歩きかけた。
そして、その瞬間そこに落ちていた物に気づいた・・・。

彼女の落し物は学生証だった。『教育学部４年　緒方純恋（おがたすみれ）』。
純恋・・・美しい彼女にはふさわしい名前だ。
僕は教育学部の2号館に行き彼女を探がし、直接それを手渡そうかとも思ったが、
学生課へ行き届けることにした。
学生課で落し物を届けると、僕の学部と名前、連絡先を聞かれ、所定の用紙に書いた。
『経済学部1年　中村涼（なかむらりょう）』と書き、連絡先？
と、迷ったが携帯電話の番号を付け加えた。
彼女から電話がくるわけなんてないよな、と思ったが・・・。

次の日の午後、講義も終わり何気なくキャンパスを図書館の方へ歩いていると、
携帯が鳴った。登録した相手からの電話ではなかったが、どこか見覚えのある番号からだったので迷ったが出てみることにした。
電話の向こうから聞きなれない女性の声で
「もしもし、中村さんの携帯ですか？」
僕が「はい、そうですが」と返事をすると、
その女性は「私、緒方と申します。昨日学生証を拾って頂いた中村さんですよね。
ありがとうございました。できれば直接お会いしてお礼をしたいのですが・・・。」
昨日の図書館の彼女からの電話だった。
「は、はい・・・いえ大丈夫です。」何が大丈夫なんだかわかんな

いけど僕はそう答えていた。
「じゃ、今どこ？キャンパスですか？これから予定はありますか？」
と彼女が続けたので、
「はい、今大学にいます。今日の講義も終わりましたし、今からはフリーですけど・・・」
と僕は答えた。
すると彼女は、大学の近くの喫茶店を指定し「じゃ４時半にそこで、お逢いできませんか？」
と続けて言ったので、
僕は「はい、わかりました。」と言って電話を切った。
今日の彼女は、昨日の涙の彼女と同一人物なのか？と思うくらいに明るく、活動的な印象だった。
だから、彼女のペースで会う約束までしてしまったのだ。
時計を見ると４時少し前だった。（あと３０分か・・・）

第二話　♪　恋の予感

４時２０分に僕は約束の場所に着いた。すると彼女はもうすでに奥のテーブルに腰掛け、
窓の外を、あの時と同じようにぼんやり眺めていた。
その姿は、やっぱり昨日と同じようになんとなく淋しげな美しさだった。
「お待たせしてすみません」僕がそう言って近づくと、にっこり笑って
「私も今来たところよ。どうぞ・・・。」と優しく席へ誘ってくれた。
確かに今来たばかりなのだろう、テーブルの上には水の入ったグラスが一つあるだけだった。
僕が彼女の向かいの席に座ると、「昨日はありがとうございました。」
と、なんだか恥らった笑顔を僕に向けてくれた。さっきまで淋しそうだった彼女の顔が、
その時はなぜだか、なんとなくだが恥らったように笑ったように見えた。

店員が水の入ったグラスをひとつ持って、オーダーを取りに来ると、彼女もまだ何も注文していなかったらしく、ミルクティーを注文した。初めて会ったに近いのだが、なんとなく彼女らしいと思ったのは彼女の美しい顔立ちと、それに似合った服装からだった。
僕はいつもと同じくコーヒーをオーダーした。
この店のブレンドコーヒーはなかなか美味く僕好みなのだ。

「そう言えば自己紹介がまだだったわね。私、教育学部４年、緒方純恋（すみれ）って言います。

昨日は学生証拾って頂きありがとうございました。」
「あっ、僕は経済学部1年、中村涼です。」とぎこちない自己紹介をした後、
「1年生ですよね？18歳？19歳？」
「はい、まだ18歳です。」
「そっか、じゃ私が3つお姉さんだね。う～ん、そしたら涼くん。って呼んでもいいかな？」
「は、はい・・・かまいませんけど。」
いくら年上でも、初対面でくん？と思いながらも、まったく嫌な気はしなかったし、
どちらかと言うと、なぜだかなんかくすぐったいような、照れるような変な感じだったが、
正直言うとホントは嬉しかった。

そして次の彼女の言葉に、僕は更なる心の動揺を隠すのが精一杯だった。
「涼くん、私すっごくびっくりしちゃったんだけど、私と涼くんの携帯の番号さぁ、
下4桁おんなじなんだよね。って言うか正確には頭3桁も同じだから、
ほとんど一緒だよね。
もうびっくりしちゃって、こんな偶然ってあるんだねぇ。すっごいと思わない？」
「・・・えっ、そ、そうなんですか？全然気づかなかったです。」
そっか、だからあの時、どこかで見た事ある番号だと思ったんだ。
どこかで見た事あるどころか、自分の番号に似ていたなんて、全く気づかなかった・・・。
「そうよ、学生課であなたの電話番号聞いた時に、びっくりしちゃって、
と言うか感激しちゃって、思わずすぐに電話しちゃったのよ。きっ

とこれって運命よね。
運命の出逢い。なんちゃって。」
僕は、その一言に、『運命』と言う言葉にドキッとして「そうですね。」
と答えるのがやっとだった。

それからは、たわいもない話を小一時間ほどして、彼女がこれから家庭教師のバイトだと言うので店を出た。
そして別れ際に、また会おうと言う約束を交わしその日は別れた。
彼女が僕に言った一言「またね。」を信じて彼女の後姿を見送った。
僕はその時、心の奥に芽生えた想いに気づきはじめていた。

第三話　♪　涙の訳

あの日に彼女が別れ際に言った、『またね。』を僕はどこかで信じていた。
でも、あの日からもう1週間が過ぎ、月も変わり、街並みはすっかりクリスマスモードに突入していた。
この1週間、僕から電話をかけようかとなんど携帯を手にしただろう？
でも結局しなかった。いや、正確にはできなかった。
彼女のあの涙のわけが気になってしまい電話をかけることが出来なかったのだ。

その日僕は、クリスマス一色の街の中で彼女を見かけた。
カフェの中へ男と一緒に入っていく彼女を偶然にも見かけてしまった。
その時僕は、迷わずそのカフェの中へ二人を追って中へ入り、2人の様子が窺える席に座った。
気づかれないように少し離れた席に座ったので、2人の話している声は聞こえなかった。でも、今にも泣きだしそうな彼女と、その前に座る男の表情から、楽しい話でないことはこの距離でもわかった。
そんな想像していた時、彼の声が店内に響いた。
「わかったよ。もうめんどくせー女だな。」
そう言うと、男は店から出て行ってしまった。
残された彼女は、ぎゅっと口を噤んで、上を向いて零れそうな涙を堪え、一つ大きな深呼吸をして、店員や周りの客に申し訳なさそうにちょこんと頭を下げ、店を出て行こうとしていた。
僕は声をかけて良いものかどうか迷った。ほんの一瞬だったがホントに迷った。
でも、迷った末に店を出た彼女に声をかけた。

「純恋さん。」と出来るだけ自然と、そして優しく。
彼女は瞳に大粒の涙を瞳に抱え、今にも泣きだしそうな顔で振り向いた。
その姿を見て、僕は心の中で一瞬、ほんの一瞬、抱きしめてあげたいと思った。
なんて、切ない表情なのだろ。そして、なんて美しいのだろう。
僕はそんな彼女に見とれてしまっていた。

「涼くん・・・。」彼女の涙声で我にかえり、言葉を探していた。
「こんにちわ。」
僕は、彼女の涙の訳を知らないふりして、少し笑顔で挨拶をした。
純恋さんは慌てて顔を上向きにし、涙を抑え、精一杯の笑顔で僕に話しかけてくれた。
「涼くん、こんな所で偶然ね。お買いもの？」
「あ・・・、はい。妹へのクリスマスプレゼントを見に来たんです。」
僕は、まさか、二人のあとを付いて来たとも言えず、焦って理由をこじつけた。
「そっか、もうすぐクリスマスか・・・。」
そう言うと、なんだかまた少し寂しそうな表情を浮かべたのが気になったが、
「そうなんだ。妹想いのお兄さんね♪　で？決まったの？プレゼント。」
と何事もなかったように彼女は話した。
だから、僕も「いえ・・・まだ・・・です。」と答えるだけにした。
「じゃ、一緒に見てあげる♪行こう。」と、僕の手を取り、最高の笑顔を僕にくれた。
僕はというと照れくさいのと、突然の展開に驚いて、顔が真っ赤になるのを彼女に見られたくなくて、僕の手を引く彼女の顔を見るこ

とができなかった。
更に、僕の胸のドキドキが彼女に聞こえてしまうのではないかと気が気じゃなかった。
それでも、僕は彼女の手をしっかりと握り返していた。

手を繋いで、街を歩くなんて事は初めての経験でもないなずなのに、この胸のときめきは？このドキドキ感はなんなんだろ？まるで恋をしてるみたいだった。
そうだ、僕は恋をしてるんだ。それも今までの恋とは比べ物にならないくらいな恋をしてるみたいに心が舞い上がっていた。

「どんな感じ？歳はいくつ？」
「えっ？なにがですか？」
「妹さんよ。妹さんはいくつ？どんな感じの女の子なの？」
「あっ、妹ですね…。えーと中３で１４歳、もう生意気で。どんな感じって言うと・・・、
そうだなーぁ、今ドキの、そうそう雑誌から抜け出てきたって感じかな。」
そんな事はどうでもよかった。妹の事より、純恋さんの事を知りたかったし、この２人の時間（とき）を大切にしたかった。
でも、純恋さんは、そんなことはお構いなしに、「そっか、中学３年生か・・・、じゃぁ、お財布とか、コスメポーチとかはどう？アクセサリーはお兄ちゃんからよりも、彼氏からもらった方がうれしいだろうし・・・うふ♪。」
なんて言いながら、彼女は、さっきまでとは違う笑顔を浮かべていた。
僕といるのが楽しいというより、プレゼント選びが楽しいって言う感じだったが、それでも僕は彼女が笑顔に戻ってくれて嬉しかった。
そして、プレゼントはと言うと、結局、コスメポーチを妹のクリスマスプレゼントとして買う羽目になってしまった。

「今日はありがとうございました。おかげでセンスのいいプレゼントが買えました。
今年は妹に、お兄ちゃんセンスなーいなんて言われなくてすみそうです。」
「そう？喜んでもらえてよかったわ。こちらこそ、楽しい時間をありがとう。」
「あの～・・・。」このまま別れたくない僕は、思い切って
「よかったら、これから夕食でも一緒に行きませんか？今日のお礼をさせてください。」
本当に思いきって言ってみた。これぞ、清水の舞台からって感じだった。
「ごめんね、今夜は家庭教師のバイトなの、でも、もう少し時間はあるからお茶でもしよっか。よかったらだけど。」
「は、はい。じゃお茶にしましょう。」と答えながら、よかったまだ今日は終わらない、そう思った。
そうして、二人は、角を曲がったところにあったカフェに入りそこのテラスで小一時間話
をした。
その話の中で、また彼女と僕の間の運命の扉をノックした。

第四話　♪　運命の１２２４

「ごめんなさい。本当は昼間、純恋さんに声をかける前…、見てしまったんです。
いや、正確には、あなたを見かけて、あのカフェの中まで追いかけて行ってしまったんです。無意識にだったけど・・・。」
「そうじゃないかと思ってたわ。私が振り返った時のあなたの顔みたらピンときちゃったわよ。あっ、見られてた。ってね。」
「ごめんなさい・・・。」
まさか、彼女が知っていて、僕にショッピングまで付き合って、更に、こうしてお茶まで付き合ってくれるなんて・・・。なぜだかさっぱりわからなかった。
「いいのよ。あの時に知らないふりしてくれてよかった。
だから今こうして涼くんとお話しできてるんだしね。
もしあの時、あなたがどうしたんですか？なにがあったんですか？
なんて聞いてきてたら、私きっと、なんでもないわ、じゃぁね。ってあの場から逃げてたでしょうね。
そうなっていたら、今のこの時間は存在しないのよ。だから、あなたに感謝してる。」
彼女の言った意味を必死に考えてみた。
『今のこの時間は存在しないのよ。あなたに感謝してる』って今この時間があって良かったって事？僕と話が出来て良かったって事？
そう思った瞬間に、なんか胸のあたりが、きゅーって締め付けられる感じがした。

「あの～、ひとつ聞いてもいいですか？」僕は、昼間会った時からずっと、聞こうかどうしようかと、迷っていた事があった。
「なぁ～に？いいけど。」
「純恋さん、クリスマスになにか思い入れがあるんですか？」

「どうして？」
「昼間、僕がクリスマスプレゼントを買いに来たって言った時に、『クリスマスか・・・。』ってとっても寂しそうに言ってたから。」
「そっか、寂しそうだったか・・・まいったな。キミってさ不思議だね。直球なのに、なんかあったかいんだよね。」
「あっ、ごめんなさい。忘れてください。なんか変なこと聞いてすみませんでした。」
「ううん、いいよ。クリスマス・・・、そうね、思い入れか、あるって言えばあるわね。さっきの男の人ね、一応彼氏だったの。って思ってたのは私だけかもなんだけどね。
で、今日は別れ話ってわけ。」
そこまで言うと純恋さんは、ふーっと大きく息を吐いてから、
「彼にね、今年のクリスマスは一緒にお祝いしようって言われてたのね。
でも、今年はもう、彼に『おめでとう』って言ってお祝いしてもらえないって思ったら、なんか哀しいって言うかなんか寂しくなっちゃったのね。」
「そうですか、おめでとうって祝ってもらえないと思ったらですか。え～、ってお祝いってクリスマスなのにおめでとうって・・・。」
「うん。私の誕生日１２月２４日なの」

その言葉を聞いた瞬間だった、僕と彼女の運命の扉がまた一つ開いた気がした。
「えっ、それってマジですか？」
「ほんとよ、嘘なんかついてもしょうがないでしょ。」
そうだよな、嘘なんてついても仕方ないよな。でも、こんなことって・・・。あるのかな？
「実は、僕も１２月２４日生まれなんです。」
「うっそ～、ホントに？それって、またまた偶然の一致じゃない。ってていうかこれってやっぱり私たち出逢うべくして出逢ったんじゃ

ない？
すっごいよね、ね、涼くん。」
「は、はい、びっくりです。」
僕はその一言を答えるのが精一杯だった。
「そっか、じゃぁさ、今年のＸｍａｓ　ｅｖｅは2人でお祝いしない？
ねっ、そうしましょ。いいよね。」
「え、ええ。」
「あっ、ごめん・・・、Ｅｖｅだもんね。予定あるよね。彼女とかいるんでしょ。」
「いないです。全然いないです。だから大丈夫です。」
僕は、必死に彼女がいない事をアピールしていた。
「うふふ♪、涼くんって可愛い。」そう言うと彼女は、思いっきり素敵な笑顔で、
「じゃ、約束ね。今年のＸｍａｓ　ｅｖｅは私におめでとうって言ってね。
私もあなたにおめでとうって言うから・・・。」

それからしばらくして、純恋さんのバイトの時間が迫ってきたので僕たちは店を出てた。
「じゃ、またね。」
そう言うと、彼女はニッコリと笑って手を振ってくれた。
僕は言葉を探したが、見つからず、ただ『今日はありがとうございました。』と言うのが精一杯だった。
そして、心の中で、やっぱり出逢うべくして出逢ったのかな？そう呟いた。

第五話　♪　秘密の場所

僕は、その夜なかなか寝付けなかった。純恋さんの事を考えると、胸のあたりがキューっと締め付けられる思いがして、今この時間彼女は何をしているのだろ？
なんて考えたり・・・。
そして、もう一つ想いを巡らせることは、今年のＸｍａｓ　ｅｖｅの事だ。
Ｅｖｅを二人でって・・・、世間じゃＥｖｅを二人で過ごすって事は・・・。
そんな事を考えていたら余計に眠れなくなってしまった。
それでも、いつの間にかに眠っていたらしい。気がつくと窓の外は、薄っすらと空が白み始めていた。

ベッドから起きだして携帯で時間を確認すると、着信があった事に気づいた。着歴7時４８分、今から1時間ほど前、着信相手は純恋さんだった。
『純恋』という文字を見た瞬間、僕の胸の鼓動は跳ね上がった。
そして、迷わず電話をかけた。
「もしもし。」と電話に出た純恋さんの声は、いつもの響き渡るソプラノより少し低めだっやけど、耳に心地よくひろがった。
「さっき電話くれましたよね。ごめんなさい気がつかなくて。」
「う、うん。あのさ、涼くん。」
「はい、どうしました？」
「あのね、え～っと、今日の授業は？」
「今日は、１２月６日の金曜日だから・・・、えっと、２限と3限と４限ですけど、
４限の国際経済論が休講だから3限で終わりですけど。」
「そう！？、私も今日は2限だけなの、涼くん・・・、そのあと予

定ある？」
「いえ、予定はないですけど。」
「じゃ、少しお話できないかな？」
「いいですよ。じゃ、2時半に3限が終わるから、3時に図書館でいいですか？」
「了解、3時に図書館ね。ありがとう。」
「いいえこちらこそ、電話頂けて嬉しかったです。じゃ、3時に」
そう言って電話を切った。
話ってなんだろう？そう思いながらも、今日も純恋さんに会えるなんて夢心地だった。
こんな幸せな気持ちで朝を迎えられるなんて、今日はなんて素晴らしい日なのだろうと、この素晴らしい朝に感謝した。

やっと3限が終わった。今日の講義は今までで一番長く感じた。
そして、図書館へと向かおうとしながらも考えることは、純恋さんの事ばかりで、今日の講義の内容なんか全く覚えていない。年が明けたらすぐに、試験があるというのに・・・。でも、話があるってなんだろ？

図書館にはすでに純恋さんが待っていた。
この間の席に座り窓の外を眺めていた。まるでこの間と同じような哀しそうな瞳だった。
それを見た瞬間、僕は彼女を抱きしめたい、そんな思いに駆られてしまった。
でも、そんな事が出来るはずもなく、僕は彼女に声をかけた。
すると純恋さんは、「あっ、涼くん。早かったね」と振り向きながら僕に微笑んだ。
僕はその笑顔を見た瞬間、彼女を愛おしく想う気持ちが溢れ出し、彼女を抱きしめたいという気持ちがぶり返してしまった。
僕はその気持ちを必死に堪え、「お待たせしました。俺、うっかり

して図書館で待ち合わせなんて言っちゃったけど、ここじゃお話できませんよね。どうします？これから」
「そうねぇ・・・。静かな所でお話しがしたいんだけど、どこがいいかしら」
「静かな所ですか・・・。いいとこありますよ。」
「えっ、どこどこ？」
「いいから、行きましょう。」

僕たち二人は図書館を出て3号館と2号館の間を通り抜けその場所を目指した。
さすがにこの間のように手を繋いでと言うわけにはいかなかったけれど、心は躍った。
「やっぱりな」
僕の思った通り、そこには人もまばらと言うか僕たち以外には一人しかいなかった。
その場所は、4号館のラウンジのテラス席と言うか、芝生の上にガーデンテーブルが並んでいるちょっとした空間だった。この季節、しかも午後3時を過ぎてそこでお茶してる人などそうはいないと思ったのだった。
「どうですか？ここでいいですか？ちょっと寒いかな？」
「素敵♪」
「でしょ。秘密ですよ」
「うふふ♪秘密？ほんとに素敵な秘密ね。」
「こんな素敵な場所がキャンパス内にあったなんて、4年生になるとあまり学校に来なくなるもんだから、気づかなかったわ」
「最近出来たばかりなんですよ。僕もこの間見つけたんです。」
「あっ、コーヒーでいい？ご馳走するわ」
「えっ、はい。」
「じゃ、ちょっと待っててね」
と言って純恋さんはラウンジ方に小走りで駆けて行った。

第六話　♪　記念日

純恋さんはトレイを両手で持ち、にっこり笑って帰ってきた。
僕にはコーヒーを、そして純恋さんは今日もミルクティーだった。
「はい、どうぞ」そう言って僕の前にコーヒーを、そして自分の前にミルクティーの入ったカップを置いてから座り、しばらくティーカップに目線を落とし、考え込んだ素振りの後「ねぇ、涼くん」と小さな声で僕の名前を呟いた。
「はい」そう答えると、「こんなことを涼くんに話すべきかどうか悩んだんだけどね、あなたには話しておかなきゃって思って・・・。なぜだかそう思って・・・。」
そう言うと、カップを口に運び、一呼吸おいてから話を続けた。

「この間の男の人覚えてる?私の彼氏だったって人。」
「は、はい。覚えてます。」
「その人がね、昨日の夜に電話してきてさ、もう一度やり直さないかって、俺が悪かったって、だから許してくれって、そう言って来たのよ。」
僕は困惑した。純恋さんが、どうしてそんな事を僕に話そうと思ったのかが分からなかったし、どう答えれば良いのかも分からなかった。そして黙っている僕に向かって彼女は、
「ごめんね、こんな事を急に言われてもどう答えていいのか困っちゃうよね。私、どうかしてるわ。ホントにごめん。わすれて・・・」
わすれて?もう今さら忘れられないよ。なぜ?なぜ今日僕を誘ったんだろ?
「あの〜、純恋さん、その事を、その彼との事を話す為に今日僕を誘ったんですか?」
「ごめんなさい。あなたに話す事じゃないことくらいわかってたんだけど・・・、でも、話しておきたかったの。なぜだか、あなたの

考えを聞きたかったの。ホントにごめんなさい。」そう言いながら、彼女の瞳は、涙で満たされ今にも溢れそうだった。
その瞳を見た時、僕は、さっきまでわからなかった事が、今はっきりとわかった気がした。正確に言うと、僕の中で僕の気持ちがやっと理解できたのだった。
「純恋さんは、その彼のもとに戻る気はあるんですか？僕の意見を聞くまでもなく答えは出てるんじゃないですか？」
きっと純恋さんも、僕と同じ想いなのだと・・・。そう思えた。
純恋さんは、「えっ」と声にもならないくらいで答えた。
「ほんとはね、あなたに言ってほしかったの。行くなって・・・。だから、だから・・・。」
そう言うと、純恋さんの瞳からは大粒の涙が溢れだした。
「純恋さん、今年のＸｍａｓ　Ｅｖｅは、僕がおめでとうって言いますから、僕が、Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙって言いますから・・・、僕じゃ、僕じゃダメですか？」
「ううううん。ううううん。ありがとう・・・ありがとう。」そう言いながら、既に決壊していた瞳からは涙が止めどなく頬を零れ落ちていた。
僕は、そんな彼女の右手の上に左手を重ねていた。無意識のうちに。

それから僕たちは、お互いの気持ちを確認し合った。僕は、あの図書館での一目惚れを紅白し、純恋さんは、そんな僕の気持ちに気づき、貴方の優しさが、温かな心が、私の心にスーッと入ってきて、惹かれて行ったと・・・。気づいた時には貴方の事を好きになっていたと・・・。お互いの今の気持ちを告白した。
この日から僕たちの付き合いが始まったのだった。
そして、この日１２月６日が、僕たちの最初の記念日になった。

第七話　♪　恋人同士

初めての二人での１２月２４日をどう過ごすのか？
あの記念日からずっと、いろいろ考えてみたが、なかなか良い考えがまとまらない。
そこで、あの秘密の場所で純恋さんと遅めのｌｕｎｃｈをとりながら、相談してみることにした。

「そうねぇ。世の中はＸｍａｓ　Ｅｖｅだけど、二人にとってはＢｉｒｔｈｄａｙのほうが重要だから、やっぱ静かに過ごしたいわよね。」
「静かにか、じゃ、ディズニーランドとかはパスか。」
やっぱ、ＸｍａｓのＴＤＬは混んでるしな。でも行きたかったな純恋さんとＴＤＬ。
僕の頭の中では、純恋さんと手を繋いでのディズニー・デートでいっぱいになってしまっていた。
「そうね。ＴＤＬは、ちょっとね・・・。そうだ、涼くん、私のアパートに来ない？
美味しいもの作るからさ、一緒に食べようよ。なんなら一緒に作る？」
僕は、自分の耳を疑った。純恋さんは今、『私のアパートに来ない？』って言ったような気がしたが・・・。
「えっ、純恋さんのアパートにですか？」
「そう、午前中は、ショッピングで、プレゼントを選んで。一緒に選ぶのよ。うふふ♪」
「プレゼントを一緒にですか？」
「そうよ♪。なんならさ、何かお揃いのものを贈りあうっていいんじゃない？どう？
初めての二人のＢｉｒｔｈｄａｙのプレゼント、記念になるし、思

い出にも残ると思うんだけど・・・。」
「そうですね。初めての二人のＢｉｒｔｈｄａｙの思い出、いいですね、それ。」
僕もその記念、思い出にその日をしたかったし、なによりお揃いって、なんか憧れる。
「何がいいかな？涼くんペンダントとかネックレスとかする男子？」
そんな会話を楽しみながらも、僕は、今のこの瞬間の幸せがまだ信じられなかった。
一目見て好きになった女性と、今こうして付き合うことになって・・・。
現実と夢の狭間にいるようだった。

「ねぇ、涼くん、聞いてる？」
「う、うん、聞いてるよ。ネックレスでしょ。したことはないけど、いいじゃないかな？
お揃いのトップって素敵だよ。ところでさ、もう涼くんって言うのはどうかと・・・。」
なんか涼くんって言う響きが、くすぐったくて仕方なかった。
「そうね。じゃ、私も純恋さんって言うのはやめて欲しいな。」
「じゃ、涼と純恋ってのは？」
「うん、いいんじゃない。その方が恋人同士っぽいし。うふふ♪」
恋人同士。なんて素敵な響きの言葉なんだ。
僕がそんな事をニヤニヤしながら思っていると。
「ねぇ、涼、なにさっきからニヤケてるの？」と彼女にすっかり見抜かれていた。
「えっ、ニヤケてなんかないよ。」
「そう？そうは見えないけど・・・。どっからどうみてもその顔ニヤケてるわよ。
ニヤケてる？そりゃそうだよ。今、この瞬間の幸福感といったら、僕のこの１９年の人生の中で一番幸せいっぱいなんだから。そう思

いながら、またまたニヤケ顔になっているのが自分でもわかった。
「それより、涼は誕生日の夜は何が食べたい？」
「う～ん。何が食べたいって急に言われてもな。」
「そっか、じゃ考えといてね♪。私、お料理得意なんだから。」
考えるもなにも、彼女が作るものなら何でもいい、っていうのが正直なところだが、
なんでも良いなんて言えるわけもなく、僕は、『わかった、考えとく』と返事をした。

第八話　♪　幼馴染のお祝い

それからの日々は、お互いの時間の許す限り二人の時間を楽しんだ。12月も半ばに差し掛かり、寒さも一層増してきたが、僕の心は寒さなど微塵も感じないほど温かで、安らいでいた。これってもしかして、恋愛ボケってやつかな？

そう思いながら、ボケならボケでもいいかな？と思うほど、その時、僕は幸せだった。

「お前、さっきから何ニヤニヤしながらボーとしてんだよ。最近、彼女が出来たからって浮かれ過ぎじゃねーの？」

「そうよ、そうよ。最近さ、なんか付き合い悪くなったしね。涼、感じ悪い。」

僕の痛いところをグサっと突き刺してきたのは、同じゼミ仲間の渡辺優人（たなべゆうと）とその彼女の田村優希（たむらゆき）だった。僕たち3人は幼馴染で、幼稚園からずっとおんなじ道を歩んできた、ある意味腐れ縁ってやつだ。

「別に、いいじゃねーか、お前らだって付き合ってんだから。中学の頃からずっと、俺だけ一人ぼっちだったんだぞ。少しは可哀そうに思ってもバチあたんねーと思うけど。」

「まぁ、そうだな。俺と、優希が付き合い始めてからも、嫌味の一つも言わずに、ず～っと一緒だったんだもんな。涼に彼女が、しかも年上の彼女が出来たんだもんな。喜ばしいことだよな。」

「ねぇ、お祝いしましょうよ。ねっ、涼。純恋さんも誘ってさ4人でさ。」

「いいなぁ、それ。優希、ナイス。じゃ、早いに越したことはない、今夜パーっとお祝いしよう。いいよな、涼。」

「えー、今夜？俺は良いけど・・・純恋がどうかな？」

「んじゃ聞いてみろよ。電話してさ。」

「そうよ、聞いてみてよ。私、純恋さんに会ってみたいしさ。」

「わかったよ。電話して聞いてみればいいんだろ。」

そう言いながら、彼女に電話をかけた。
電話を切ると同時に優希が、「どうだった？空いてるって？」とせっついてきた。
「う、うん。今日はバイトもないから大丈夫だって、６時以降なら大丈夫みたい。」
「純恋さんってどんな人かな？涼が一目惚れした女性って、すっごく興味あるのよね。」
「同感。こいつがさ、こんなにもデレデレしてる相手って会ってみたいよな。」
「もう、お前らいい加減にしろよ。それより、場所は？どこでお祝いしてくれるんだよ？」
僕は、そう言いながらも純恋との仲を冷やかされるなんて、まんざらでもなかった。
そして、この時はまだ、今夜また新たな運命に驚かされることになるなんて思いもしなかった。

その後も、３人でくだらない話で盛り上がっていたらなかなか場所が決まらず、やっと決まった時には５時を少し回っていた。それから純恋に電話をして今日の場所を伝え、６時にその店で待ち合わせをすることにした。
僕ら３人は、先にその店、駅前のレストランバーに向かうことにした。
６時少し前に僕は、純恋を待つために一人で店の外に出ると、ほどなくして純恋が歩いて来るのが見えた。純恋は僕を見つけると、手を振りながら走ってこっちに向かってきた。
「ごめん。急に無理言っちゃって。あいつらが、どうしてもって言うから。」
「ううん。いいのよ。涼のお友達なら、私も会いたいわ。しかもお祝いしてくれるんでしょ。楽しみだな～。」
「うん。よかった。無理して来てくれたんじゃないかって不安だっ

たんだ。」
「無理なんかしてないよ。ワクワクしながら来たのよ。みんなは？」
「うん。2人はもう中で待ってるよ。」
「そっか、涼だけ外で待っていてくれたんだね。寒かったでしょ、ありがとう。」
「今、外に出てきたばっかりだから大丈夫だよ。純恋の方がさむかっただろ。
早く中に入ろう。」
「うん♪」

二人で店の中に入ると、テーブルでは優希と優人がこっちを見ながらなにやらニヤケ顔で話していた。
僕たちが席について、それぞれの自己紹介を終えた時、優希が言った一言から・・・。
「私たち3人、幼馴染なんです。幼稚園からずっと一緒なんですよ。涼の事なんでも聞いてくださいね。知ってること、なんでもお話ししますから。うふふ♪」
この一言から僕と純恋の出逢いがやっぱり運命だったんだって確信することになるなんて、その時は思いもよらなかった。

第九話　♪　映画のような二人

「へぇー、３人は幼稚園からの幼馴染なんだ。女の子一人で男の子二人じゃ優希ちゃんの取り合いになっちゃったんじゃないの？」
「あっ、こいつらは生まれた時からずっと付き合ってるんだって、だから俺がこいつらと初めて会った幼稚園の年長の時には俺の入る隙間はなかったんだ。ってかもう３歳で将来を誓い合ってたんだって。笑っちゃうだろ。」
「素敵じゃない。もう婚約して１６年になるんだね。すっご～い。」と純恋は心から感動した様子だった。
「優希さんも優人くんも、いいなぁ・・・羨ましい。」
「そんな・・・。あっ、でも、純恋さんと涼の運命の方が素敵だと思いますけど。」
「聞いちゃったの？涼ったら・・・。」
今度はなんかすっごく照れた表情で、純恋の頬はピンクに染まって耳が真っ赤になった。
その顔を見て、僕はとても嬉しかった。そしてホッとした。
「でも、ほんとすっごいよな。偶然の一致なんてもんじゃないよな。携帯の番号といい、誕生日といい。しかも誕生日はＸｍａｓ　Ｅｖｅだなんて・・・。映画みたいだよな。」
優人の言葉に変に納得してしまい改めて二人の運命を創ってくれた神様に感謝した。
「そういえばさ、優希ちゃんと優人くんは生まれた時からずっと一緒だって言ってたけど、涼は違うの？」
「うん。俺は、幼稚園の時に引っ越してきてさ、こいつらと一緒の幼稚園に年長の時に入ってから。それからはずっと一緒だけどね。」
「そうそう、こいつさ幼稚園に初めて登園した時に、めそめそ泣いてたんだよな。
お母さんの後ろに隠れて。」

「そうそう、それで可哀そうになって優希が一緒に遊ぼうって声かけたんだもん。
懐かしいな・・・。」
「えっ?、そうだったっけ?」
「そうだよ、お前あの頃、泣き虫涼くんって呼ばれてたんだぜ。」
純恋は、そんな話を面白そうに笑いながら聞いていた。
でも、僕にしてみりゃ、そんな昔の『泣き虫涼くん』なんていう事を純恋に知られるのは恥ずかしくて仕方がなかった。
「そう言えば、お前らは幼馴染カップルだから、お互いにいろんな事を知ってるんだよな。でも、俺と純恋は、まだまだ知らない事がいっぱいなんだな。お互いに。」
「そうね♪。これからいっぱいお互いを知っていけばいいのよ。私たち、まだ始まったばかりなんだから。」
そう言って彼女は僕に向けてとびっきりの笑顔をくれた。

「そう言えばさ、涼って引っ越してくる前ってどこ住んでたんだっけ?
俺たち聞いたことあったっけ?」
「えー、そう言えば知らないね。聞いたことないかも。ねぇ、どこに住んでたの?」
「えっ?言ってなかったっけ?九州だよ。長崎県。」
それを聞いた瞬間、純恋はとても驚いた様子で、
「うそ!?、そうなの?涼、長崎に住んでた事あるの?」
「うん、5歳までだけどね。」
「そっか・・・。」と言った時には、なぜか笑みが広がっていた。
「どうしたんですか?純恋さん?」と言う優希の後に、純恋は続けた。
「もう、笑っちゃうしかないわね。私も長崎出身なのよ。」
その純恋の言葉に、僕は息をのみ、「えっ・・・」とだけ言うと、続ける言葉をうしなった。

しかも、僕が5歳の時、純恋8歳、長崎県の同じ市の同じ町内に住んでいたのだ。
こんなことって、こんな出逢いって映画の中だけかと思っていた。

第十話　♪　ふたりの街

店を出たのは9時を少し回った頃だった。優希と優人はこれから寄るところがあるというので、店を出て別れた。
「さて、今日は、突然呼び出したりしてごめんな。」僕のその言葉は、すまない言う気持ちよりも、照れ隠しの気持ちの方が強かった。
「いいってば、もう気にしないで。私ね、ホント言うと嬉しかったのよ。涼がお友達に私の事を彼女だって紹介してくれて。それにね、今日はとっても楽しかったわ。」
純恋はそう言っていつもの笑顔を返してくれた。
「うん。そうだな。楽しかったしな。でも、ありがとう。」
「うん。私の方こそお礼をいわなくちゃ。涼、今日はありがとう。」
そう言うと純恋も恥ずかしそうに俯いてしまった。
「さ、じゃ、お送りしますよ。お姫様♪」
「いやだぁ♪。お姫様だなんて、恥ずかしい。」
純恋は俯いたままだったが、耳がほんのり紅く染まった様子からすると顔も紅く染まっているのだろう。そう思うと純恋が愛おしくて、可愛らしくて抱きしめたい衝動に駆られてしまった。でも、寸前の所でその衝動に理性が勝利をおさめる事ができた。
「うん、ありがとう。でも、その前にちょっと行きたいところあるんだけど。」
「いいけど、どこ？」
「私ね、大好きな場所があるの。ちょっとした丘の上の公園なんだけど、夜は夜景がとっても綺麗なのよ。涼と一緒に見たいなって思ってたの。」
「そっか、じゃ、一緒に綺麗な夜景を見に行こう。」
その公園は、確かに丘の上の小さな公園だった。小さいけれど、とても手入れの行き届いた綺麗な公園だった。

僕たちは、ジャングルジムの一番上に座り、眼下に広がる街の明かりを眺めた。
「ねっ、綺麗でしょ。これを涼にみせてあげたかったの。」
「マジですごい。こんなに夜景が綺麗に見える場所が、こんなに近くにあったんだ。
しかも、俺たちの街がこんなに綺麗だったなんて・・・。」
「そうね、とっても綺麗・・・。でもね涼、あなたが5歳まで過ごした街の夜景はもっと綺麗なのよ。山の上から海が見えるの。街の明かりの向こうに船が見えてね、夜の海がとっても素敵なのよ。」
「そっか、覚えてないもんな。そんなに素敵なんだ・・・。
いつか行ってみたいな。二人でさ。」
「そうね・・・。いつか、きっと行けるわよ。二人で。」
「でもさ、俺たちの出逢いってすっごいよな。こういうのを運命の出逢いって言うんだろうな。もしかしてさ、幼いころにその素敵な場所で顔合わせてたかも知れないんだよな。」
「そうね。涼が5歳、私が8歳か・・・。会ってたかもね。うううん、絶対会ってたわよ。」
「俺、この出逢い大切にするよ。」
「うん。私も大切にする。」
「寒くなってきたな。そろそろ帰ろうか。」
「うん。」

僕たち二人はジャングルジムから降り、手を繋いで歩き始めた。お互いの手は、冷たく冷え切っていたけど、二人の心は暖炉のように柔らかな温もりが満ちていた。
「ねぇ、涼、12月24日に食べたいもの決まった?」
「う、うん。ハンバーグ。」
「ハンバーグ?そんなんで良いの?まるでお子ちゃまだね。」
「いいじゃんかよ。俺はハンバーグが好きなの。」
「はい、はい。わかりました。じゃ、お子様ランチみたいにしてあ

げましょうか？」
「もう、俺は子供じゃないっつーの。」
そんな話をしながら歩いていたら、あっという間に純恋のアパートの前まで来ていた。
「ねぇ、コーヒーでも飲んでいく？」
「えっ。う、うん。いや、今日は帰るよ。」
もちろん、このまま別れるよりは、部屋にあがってコーヒーを飲みながら、まだまだ話したいことはいっぱいあったし、ずっとずっと一緒にいたかった。
でも、初めての純恋の部屋は、１２月２４日にしたかったから。
「そっか、うん。今日は送ってくれてありがとうね。おやすみ。」
純恋も、僕の気持ちがわかってくれたのか、それとも同じ気持ちだったのかは、わからないが、そう言って笑顔を僕にくれた。
僕は心の中で、今日の出来事を思い起こしながら、「おやすみ。純恋、出逢ってくれてありがとう。」と返した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5327x/

Lovers 〜運命の二人〜

2011年11月20日19時12分発行